

## 麗江の古楽：雲南に残る唐の音楽と奇才

著者	黄 名時
雑誌名	名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇
巻	41
号	1
ページ	27-36
発行年	2004-07-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00000836">http://doi.org/10.15012/00000836</a>

[研究ノート]

## 麗江の古楽

### ——雲南に残る唐の音楽と奇才——

黄 名 時

#### 1. はじめに

2001年の秋に雲南の風光明媚な街・麗江を訪れた筆者は、当地で古楽コンサートを観賞する機会を得、そこで極めて印象に残る体験をした。会場では古楽器が演奏されたが、演奏者がすべて70～80才の白ヒゲの老人という風変わりな古楽演奏会である。この古楽は唐宋の詞牌、曲牌が道教をキャリアーとして今日に伝えられたもので、他の地方では夙に失われナシ族のみが比較的完全に保存してきたものである。筆者はこの楽団を主宰する宣科という司会者兼演奏者を務める、浅黒い顔の人物のことが特に気になっていた。少数民族出身であるこの人物は漢語と英語を自在に操り、一流の弁舌で、立て板に水と言わんばかりに滔滔としゃべり、発言内容も大胆で、ナシ古楽は自分を抜きにして語れないといった口調である。漢語はともかく、ネイティブと見まがうほどに英語を上手に話し、中国の田舎でかくも大胆に豪語するユニークな人物の存在に、筆者は驚きを禁じ得なかった。中国では少数民族を配慮する優遇政策があり、自分も70才を越え何も恐れるものはないと言う。さらに、「過去に中央の国家主席が訪れた折にも私の主宰するコンサートを賞賛し、古楽団の事業を支持してくれている」と、いわば、お墨つきを貰ったという勢いである。

筆者は直接宣科氏とも対話をしたが、雲南の片田舎に居るこの特異な人物にある種の不思議

な興味を覚えた。本稿では周文林主編の『宣科と納西古楽』等に基づいて、この‘奇才’を生み出した風土、背景を探り、麗江に残された幻の唐楽等の文化遺産を探求したい。

#### 2. 麗江とトンパ文化

雲南省は滇とも称され7つのブロックに分けられる。いわゆる滇西北、滇東北、滇東、滇中、滇西、滇西南、滇南である。ここには古代に高度な青銅器文化が存在した。滇西北に位置する麗江は山河が交錯し、地形は変化に富み、暖冬涼夏で、四季、春の如しと言われる地方である。ここは原始林の広がる風光明媚な「麗江玉龍雪山風景名勝区」として国の重要風致地区に指定されている。

「麗江の十絶」と称する次のフレーズは、この麗江地域の特色をみごとに言い表している。

1. 陽春白雪の玉龍山。
2. 金江劈流の虎跳峡。
3. 万里の長江の第一湾。
4. 古風五色の大研城。
5. 宝山の奇観の石頭城。
6. 杜鵑王国の老君山。
7. 神秘的絵画のトンパ文字。
8. 玉水清音のナシ古楽。
9. 蓬萊の仙境の瀘沽湖。
10. モソ風情の母系社会。

麗江古城・大研鎮は山村と水都の両者の景色を具えた千年の歴史を有する高原の水郷である。街のメイン通りは河に沿い、路地は用水路に面し、泉水が各家庭をめぐり、門を開けば川があり、眼前には柳がある。古城は独特な水の都としての景観をなしている。この古城には至るところに流水があるが、古城の住人には用水のきまりがあり‘三つの井戸’の原則を厳格に守っている。泉の湧く第一の井戸水は飲用に供し、下流の第二の井戸水は野菜を洗うために用い、さらにその下流の第三の井戸水は洗濯用として、これらを乱用することはない。また、古城には明清時代のアーチ型の石橋が数多く保存されている。これまで数百年もの間、風雨、戦火、地震などに見舞われてきたが今も往時の姿を残しており、‘中国のベニス’、‘高原の姑蘇’と称されるこの街に壮麗と質朴の風情を添えている。

麗江県は全国唯一のナシ族自治県であり、悠久の歴史の中でナシ族の人々はここに燦然たるトンパ文化を創造してきた。トンパ文化の名称はそれがトンパ教の中に保存されていることに由来し、千年近くもの歴史をもつ。ナシ族は古くは‘麼些’と呼ばれ、これまで彼らは北から南に移住してきた氐羌と呼ばれる民族集団であるとされてきた。ナシ族のトンパ文字は世界で唯一の保存の完全な‘活きた象形文字’であるとの誉れが高い。1300余のトンパ文字があり、1000余種もの組み合わせによって、ナシ族の歴史、文化、宗教、芸術、文学および科学技術などが記述され、大量の文献が今も保存されており、一つの奇跡的文化遺産として興味津津たるものが有る。古色蒼然とした古城にはナシ族の民間建築や服飾、日常生活があり、今も伝統的文化や習俗が保持されている。ここでは‘活きた歴史’であるトンパ象形文字やトンパ洞経音

楽のナシ古楽が鑑賞できる。ナシ古楽は世界芸術史上の貴重な作品である。ナシ族の人々は白沙細楽・ナシ古楽を大切に保存してきたのみならず、さらにはペルシア将来の四弦の弾披琴‘蘇古篤’および元人の遺音とされるナン洞経古楽を保持している。

### 3. 現存する国宝級音楽

唐宋時代には道家の洞経音楽と儒家の宮廷音楽が一時隆盛したが、以後、時代の変遷とともに次第に伝承が途絶えていった。麗江はもともと交通の便が悪く情報が伝わらない貧困な僻地であるが、しかしその文化には相当な包容力と吸収力がある。ここはまた僻地であるがゆえに戦禍を避け、中原との文化交流の中で唐宋時代の音楽を保持することができた。即ち、貴重な文化遺産が玉龍雪山麓のナシ族の居住地区で保存され、さらには独特の特色をもつナシ古楽に発展し昇華しているのである。

麗江地区のナシ族の学者の研究によると、1140年から1368年の間、即ち宋代から元代にかけて中原地域の詞・曲が四川をへて麗江に伝えられ、それが音楽を愛好するナシ族に受け入れられ、さらにナシ族の音楽と溶け合って今日のナシ古楽になったという。驚くべきは、ナシ族の人々が現在も依然としてこの唐宋元時代の中原の詞・曲および道教の宗教的礼楽を保持し伝えていることである。例えばナシ族が好んで演奏する『八卦』の曲は、唐の玄宗皇帝・李隆基の作である『紫微八卦』の原形とされている。このほか、ナシの琴・笛などの音楽では中原で夙に伝承の途絶えた‘工尺譜’という古譜が今も用いられている。

ナシ古楽はまさに典雅・莊嚴の唐宋皇室の宮廷音楽と純粋な道家の洞経音楽とが結合し、さ

らにナシ族の文人雅士の数百年にわたる伝承と創造によってナシ族の民歌・民曲・演奏法が融合されたもので、今日‘古曲・古楽器・古稀老人’という独特無二の3種の組み合わせとして演奏されている。中国ではこの古楽が‘稀世の三宝’、‘盛世の元音’、‘中国古典音楽の活きた化石’などと称され、国宝として扱われている。

‘ナシ古楽’は元を正せばナシ族独自の民族伝統音楽ではないことが知られるが、その源としては道教の談演『三洞経文』の宗教的礼楽と、儒家が本家本元の風雅な管弦楽、および民間に伝えられた宮廷宴楽と詞牌・曲令が含まれ、それらは歴代、道場や教坊で演奏されていたものである。中原の移民によっていつごろ麗江に伝えられたかについては上述の年代のほか諸説紛紛、三国時代から明末清初に至るまで定かではなく、統一した見解はない。それは西京（西安）、南京、北京などの漢文化の中心地から伝来し、麗江で代々継承され伝えられてきたもので、発祥地では滅び失われた音楽が麗江で奇跡的に保存されてきた。詞や曲が中原地域でどのように伴奏され歌われたのかは早くから不明となっていたが、洞経音楽には詞や曲の音楽伴奏と歌い方が保存されており、唐宋音楽の‘活きた標本’と考えられている。

洞経音楽の曲目を見ると、唐宋元の3つの時代の詞牌・曲牌に基づくものがあり、例えば麗江のナシ古楽の『水龍吟』、『浪淘沙』（図版1）、『山坡羊』（図版2）などはいずれも唐・宋・元詞の詞牌で、『一江風』は元曲の曲牌である。上述の如く『八卦』は741年に唐の玄宗皇帝・李隆基が創作した宮廷音楽『紫微八卦』の舞曲であり、『浪淘沙』は南唐・李煜の時代に制作された古曲である。また、『龍水曲』は1551年から1554年の間に鄭述祖が作った『水龍吟』が基になっているとされるもので、明代では『桂枝

香』というのも見られる。

洞経は道教的意味合いの強い名称であり、道士の修行する‘洞経’を連想させる。この音楽の旋律は凡俗を超越した夢幻的情調があり、洞経の起源は道教の祭典や儀式の音楽にあるとする説がある。洞経音楽はおおらかで美しく豪華に感じられるが、演奏時には文楽と武楽の区別があり、楽器は大方が古代の宮廷楽隊が演奏時に用いた楽器が使用されており、当初は宮廷音楽であったと考えられる。洞経には道家音楽の飄逸、儒家音楽の雄渾と優雅、宮廷音楽のおおらかさと莊嚴、江南の調べの優美と清新などがそなわっている。洞経音楽は道家文化に源があって仏教文化のなかで発展し、そして民族文化のなかに根を下ろしたものであると言える。

今日の麗江の民間で俗に言う‘ナシ古楽’とは実質、儒道合体の上述の宗教的‘科儀音楽’・洞経音楽が中心になっているが、長年の口承のなかでナシ族の心情や美意識およびナシ音楽の表現法や艶やかさが微妙に溶け合っており、漢民族とナシ族の文化が融合した特色が認められる。主な曲目としては上述のもの以外に、『万年歡』、『到夏来』、『偈子』、『十供養』、『歩歩嬌』等がある。

ナシ古楽のうち特に保存保護の必要な古楽が3種類ある。一つは麗江東部の山間地区に伝わる原始社会の遺風を残した中国最古の歌舞音楽の『熱美蹉』であり、二つは物語と筋立てをそなえた700年以上の歴史を有する大型の管弦楽組曲『崩石細哩』で、三つは中原より伝えられナシ化した前述の唐宋詞・元曲と道教の礼楽である。これら3種類の古楽は中国の音楽史のみならず世界のそれにおいても特別の価値を持ち、‘中国音楽の活きた化石’と称されている。

## 浪 淘 沙

丽江洞经音乐曲牌

南唐·李煜词

宣科填配

 $1 = {}^{\sharp}C \frac{2}{4} \frac{3}{4}$   
 $\text{♩} = 60$ 

(6 · 1̣ 5 6 | 1 · 6 | 2 · 5 3 5 | 1 · 2 1 6 | 5 3 1 · 0 |  
 4 6 1 2 1 2 | 3 · 5 | 2 2 1 6 · 1 5 3 5 | 6 · 5 | 6 · 0 |  
 5 · 3' | 2' · 3' 1' 2' 1' | 6 · 5 | 6 - | 1' · 2' 1' 6 |  
 帘 外 雨 潺 潺, 春 意  
 5 · 6 1' 2' | 6 · 5 | 6 - | 5 · 6 1' 2' | 6 1' 5 2 #4 |  
 阑 珊, 罗 衾 不  
 3 - | 3' · 5' 2' 3' | 1' - | 1' 1' 2' 1' 2' | 3' · 2' |  
 耐 五 更 寒, 梦 里  
 3' · 0 | 3 · 5 | 6 · 1' 5 2 #4 | 3 · 2 | 3 - |  
 不 知  
 5 · 6 3 0 | 3 2 3 5 7 | 6 · 1' | 5 · 3 5 6 | 1' 0 |  
 身 是 客, 一 晌  
 6 · 1' 5 2 #4 | 3 - | 5 · 6 5 6 | 1' | 6 · 1' 5 2 #4 |  
 贪 欢。 独 自 莫  
 3 - | 3 · 6 5 1 | 2 · #4' | 3' · #4' 3' 2' | 1' 6 1' 2' 3' |  
 凭 栏, 无 限 江  
 2' · 3' 1' 7 | 6 - | 5 · 3 5 1' | 6 · 1' | 5 · 3 5 6 |  
 山, 别 时 容 易 见 时  
 1' - | 2' 2' 3' 2' | 1' 0 6 | 5 3 1' 0 | 1' 2' 1' 2' |  
 难, 流 水 落 花 春 去  
 3' · 5' | 2 2 1' 6 · 1' 5 3 5 | 6 · 5 | 6 · 0 :| 2 2 1' 6 · 1' 5 3 5 |  
 也, 天 上 人 间。 天 上 人  
 6 - | 6 - ||

图版1 [浪淘沙]

# 山坡羊

1 =  $\sharp C$

$\frac{2}{4}$   $\frac{3}{4}$

丽江洞经音乐

元·张养浩 词

宣 科 填配

(3 2 3 5 7 2̣ | 6 - | 6 6 1̣ 5 3 | 6 1̣ 6 5 | 3 5 2 1 2 | 3 5 6 3 |

2 3 7 2 | 6 - | 3 2 3 5 7 | 6 - | 2 3 1 7 | 6 1̣ 5 3 |

峰峦 如 聚, 波 涛

6 5 3 2 | 1 - | 3 2 3 | 6 1 6 | 1 2  $\sharp 4$  | 3 . 5 |

如 怒, 山 河 表 里

2 1 6 0 | 2 3 2 1 | 6 5  $\sharp 4$  | 3 . 2 | 3 . 0 | 5 6 3 0 |

潼 关 路, 望

3 5 7 | 6 . 5 6 | 7 2 6 - | 2 3 1 2 7 2 | 6 . 5 | 6 . 0 |

西 都, 意 踌 蹰。

5 6 3 5 | 6 1 2 2 1 6 | 5 . 6 | 5 0 |  $\sharp 4$  3 - | 2 1 2 3 0 0 |

伤 心 秦 汉 经 行 处,

3 2 3 5 | 6 . 1 | 3 2 3 5 | 6 - | 6 0 5 3 | 6 1̣ 6 5 |

宫 阙 万 间 都 做 了 土, 兴, 百 姓

3 5 2 1 | 3 0 6 3 | 2 3 7 2 | 6 - | 3 0 6 3 | 2 3 7 2 |

苦; 亡, 百 姓 苦。 亡, 百 姓

6 - ||

苦。

图版2 [山坡羊]

純粹のナシ古楽の一つとされるものに『熱美蹠』がある。これはアニミズムの信仰と深く関わるものであるが、今日に至っても麗江の大東・鳴音・宝山一帯の山間地域のナシ族は葬送の儀式を行う際に、老若男女が手と手を取りあって火を囲み、ゆっくりとした歩調で歌いながら足で地を踏みならして踊り、獣をまねたように足を踏み切って跳ぶなど、依然としてこのような舞踊を踊っている。この種の歌舞がすなわち『熱美蹠』であるが、これは原始社会の時代に現れた原始音楽で、ナシ族の祖先が‘飛魔’を追ひ払うのに用いた一つの儀式であるとされる。この歌舞には死者を悪霊から守る意味がある。

もう一つの純粹なナシ古楽としては、ナシ族の祖先が約700年前に創作した『崩石細哩』の楽曲がある。これは漢語では『白沙細楽』と訳され、独奏、合奏、歌唱および舞踊から構成されている。この楽曲の重要な要素は器楽による合奏があるという点である。13世紀までは洋の東西を問わず『崩石細哩』のように、筋立てとストーリーとハーモニーをそなえた管弦楽は出現していなかったとされる。

#### 4. 奇才宣科——人とその生立ち

ナシの古楽といえば、宣科という伝奇的人物を離れて語ることはできないと言われる。宣科氏は大研古楽会の会長で、‘大研の一怪’（雲南には‘十八怪’がある）と称される人物である。氏は中国と西洋の学を修め、実務能力にもたけ、本人は漢語よりも英語のほうが堪能という。氏の主導によって数百年の歴史を有する大研古楽会が再建されたが、再構された古楽隊はすでに国内外で千回以上の公演を行い、聴衆は延べ百万人以上にも達する。

筆者もその古楽コンサートを鑑賞した。宣科氏は丈がすそまでである紺色の単衣を着て、他の楽師たちはいずれも単衣の上に更に錦の上着をはおっている。楽隊の楽師のほとんどが70～80歳の老人であり、それぞれが400～500年もの歴史を有する古楽器を抱えている。宣科氏は音楽の指揮と司会をつとめていた。眼鏡をかけ、現在74歳になる老年者であるが、その声は力強い。氏はまず最初に観客に雲南なまりの漢語共通語と流暢な英語で楽隊と古楽曲について紹介したが、つづく中国文明と現代社会についての説明の中では機知に富んだ言葉が次々に飛び出し、生き生きとした内容とユーモアが常に人々の笑いを誘っていた。

コンサートでは『八卦』や『安魂曲』、『霓裳羽衣曲』等が演奏される。‘霓裳羽衣の曲’は白居易『長恨歌』のなかに「驚破霓裳羽衣曲」と詠われたもので、これは唐の玄宗皇帝の時代に天女を歌った舞曲である。場内に古楽が響きわたる。管楽器と弦楽器の両者が入り混じっているが、‘琴瑟相和す’といった風情である。

宣科氏の祖先は明朝の嘉靖年間に安徽の宣城から雲南の鶴慶に移住した漢民族である。曾祖母はナシ族、祖母はチベット族の康巴貴族、祖父は拳人であった。多民族の血縁のゆえに、父・宣明德は殊に聡明で、7つの民族の言語に通じていた。父はその傑出した演説能力ゆえに外国人宣教師から重視され、ラマ人をキリスト教に改宗させるための遊説を行ったこともある。父は最初のナシ族の宣教師であった。また、ルーズベルト大統領の子息の通訳も担当していた（大統領の令息は優れた狩人で、当時、宣科の父親とともにパンダの捕獲に携わっていた）。母親は康巴のチベット族の有名歌手であった。

父親が宣教師と関係が深いことから、宣科氏は幼少から麗江の教会学校に通い西洋文化の洗礼を受け、なまりのない英語を習得した。教会の開設する中学高校を卒業した後、昆明へ出て学業を継続し、昆明の姉夫婦の援助を受けた。姉の夫は当時、チベットのダライ政府の昆明駐在事務所長を務めていたため、宣科氏は何ら生活の心配もなく芸術の勉強に専念することができた。

新中国の成立後、氏は昆明市の文芸工作団に入り、楽団の指揮者を担当した。姉夫婦はインドに移住したが、宣科の生活援助のためインドから香港の銀行に送金していた。宣科氏の全く知らないことだが、当時、国民党の特務経費がこの銀行から支払われていたため、氏が銀行へ引出しに訪れた時、彼を待っていたのは拘留と尋問であった。出自に問題があるとされ、1958年に氏は紅河州の僻地の期北山へ護送され、1978年までの20年余の間、労働改造に服す監獄生活を送った。出所後は麗江に戻り中学高校で英語教師を務めた。

労働改造によって氏は身体が鍛えられたため、その後、麗江の農村奥地にまで深く入り田野で観察と調査を行うことができた。いくつもの言語に通じた利点を生かし、氏は音楽民族学の課題を究めるためナシ族の原生文化圏のなかに深く入り込んでいったのである。1981年に氏は大研古楽会に参加して演奏者兼通訳者となった。

ナシ古楽の発掘と救済は宣科氏の長年の宿願であった。氏は老芸人たちとともに400年余りの歴史をもつ大研古楽会を再建した。曲譜の整理を行うと同時に、理論的帰納と研究も行った。古楽曲23曲を発掘して整理したが、その中で救済が遅れたため、老芸人の死去により伝承が失われた楽曲も多数ある。

宣科氏は語学の才能があり、チベット語、ナシ語、漢語、英語、ドイツ語に精通しているため、橋渡し役として古楽を国内外に紹介している。氏は大器晩成型の学者であるが、多民族の異なる思考方法で物事を理解し考えることに慣れており、多数の新しい見解を提示して、今や音楽界の注目を浴びている。

## 5. 民族音楽に関する新学説

宣科氏はかつて冤罪によって20年間もの牢獄生活を送ったが、その後、その特殊な経験と音楽に対する情熱・資質・信念によって、氏は堂々と自らの持論を展開していった。結果、その大言壮語の中から人に不可解ながらも傾聴させる学術的悟りが開かれていった。例えば、「音楽の起源は恐怖からきている」、「トンパ教はナシ族自らが生み出した宗教ではなく、チベット族の本教が再生され伝承されたものである」、「ナシ族の祖先は羌族にあらず」、「麗江の古楽のなかの白沙細楽は元人の遺音にあらず」等々、これまでの学界の定説が氏によって覆され微塵に砕かれた。これに、人々は愕然とし覚醒もし、また反感を覚え啓発を受けることとなる。また、氏は「ナシ族が英語を学ぶのは『第二外国語』としてであるから『第一外国語』（漢語）を手立てとすべきでなく、直接母語から英語に入るべきである」とも主張している。かくして氏は毀誉褒貶の環境の中で『氷炭の思い』を抱くのみである。

ただ、宣科氏の学術上の見解は特に奇想天外なものではなく、それは独自の眼識から俗説を分析し論証した結果である。かくして歴史、宗教、音楽などの領域における定説が新たに書き換えられていくこととなる。ここに、才気横溢するそのいくつかの学説の論点を記しておこう。



### 1) 『白沙細楽』はモンゴル音楽にあらず

『白沙細楽』については従来、モンゴル族の音楽であるとする説とナシ族の音楽であるとする説の2説があり、とりわけ前者が優勢であった。これに対し宣科氏は、文献、語義、楽器史、音楽の4つの面から探究し、次のように結論づけている。

名は体を表すことから、標題はナシ族の呼称である。この大型組曲はナシ族独自の音楽で、さらにはイスラム音楽の痕跡が認められる。語義から考えると、『白沙細楽』は『白屍細哩』や『崩屍細哩』に基づくものであり、伝説、文献および社会的機能からすると、これはナシ族の『安魂曲』であって、戦死した(敵と味方双方の)将兵を弔うものである。(ナシ族の居住地を古くは『篤』と称したが)楽器史の面からみると、中国全土で唯一の『蘇古篤』の楽器がその編成上欠くことのできないものとなっていること、また中の第二章『一封書』が『阿賛』と偶然にも一致していることなどから、イスラム音楽と何らかの繋がりがあるとみられる(楽器にもトルコ楽器の特徴がある)。音楽の風格からすると、これはナシ族の風格であってモンゴル族のそれではない。なかでも『一封書』はイスラム音楽の影響があるものと思われる。また心理学的側面から考えると、それは元朝世祖の贈り物では決してありえない。何故なら、これは死者の傍らでのみ演奏されるものであるからである。以上のことから『崩屍細哩』すなわち『白沙細楽』は『民間で創作された』ナシ族の『安魂曲』としての民族音楽である。

### 2) ナシ族の多声混唱曲『熱美蹉』の原始的状態——音楽の起源は恐懼より出ずる

『熱美蹉』の発祥地は雲南省麗江の大東、宝山一帯で、ナシ族が人が亡くなった時に歌い踊る

歌舞形式である。

宣科氏は、『熱美蹉』は旧石器時代後期のナシ族祖先の民歌であるとし、総合的観点からみて『熱美蹉』のような『現在も活着ている』原始民歌には以下の要素が具わっていると考えた。

1. 多声的であること。人類の音楽活動の中では混唱が斉唱に先行し、その『和声』は今日の和声とは全く異なり、純度の高い心地良い音程はほとんど考えられない。
2. その『創作材料』は名実ともに大自然界から取られ、且つ人類最古の原始の生産、生活および觀念形態とも密接な関係がある。
3. ずっと後の、今日の音楽活動に至るまで、そこでは楽器の伴奏が一切排除されている(拍手も含む、声楽が器楽に先行)。
4. それは同様の原始の舞踊と結び付くものであって、分け隔てることはできない。
5. この種の音楽の社会的内包はまずトーテム崇拝と関係するもので、即ち一種の宗教的性質の活動であるが、それが儀式であるとは限らない。つまり宗教意識の遠因と種族意識の近因とがある。
6. この種の音楽活動を行う民族は、源が深いというものではなく、開化の遅れた民族ということである。
7. この種の『活きた音楽の化石』は当地の『生きたその他の原始文化』の裏づけが必ずあり、決して単独で存在するものではない。
8. 同時に原始人類の遺跡の出土があるはずであり、即ち『死んだ原始文化』の実証がある。
9. それが生まれた土地は、気候、地理・地質などの各方面において、生物が今日まで集まり生き長らえる条件が具わっていない

ければならない。

従って、『熱美蹉』の存在は、美学領域の自然美すなわち真実の美、汚染のない美、わざとらしさのない美などを物語る。

### 3) ‘熱美蹉’の来歴について——音楽の起源は労働にあらず

上述の如く『熱美蹉』はナシ族が葬儀の際に歌い踊るもので、ある種の歌舞形式になっている。‘熱美’は一種の物の怪の呼称で、それは同時に善と悪の属性をもち、雌でもあり雄でもある。彼らはよく森林や野原に出没して人畜に危害と福をもたらす。それは悪であり妖怪であるがゆえに、これを追い払わなければならない。また、それは善であり神（高級な霊）であるがゆえに祈り乞わなければならない。‘蹉’は、イ族のほとんどすべての言語系統で‘跳る’<sup>おど</sup>という意味になっているが、ここでは‘歌い跳る’の意である。『熱美蹉』に対する直訳は‘飛魔の跳り’ということになる。

氏は‘熱美蹉’の由来について次のように結論づけた。

1. 原始の人類の生存意識は、安全であるか安全でないかの生存意識を含んでいる。
2. 安全な生存を得るためには、非安全的要素を排除する必要がある。
3. 非安全的要素を排除するために‘追い払う’行為が生まれ、これが次第に原初の‘歌い踊る’という行為に進んでいった。
4. この種の‘駆除’の意識は何処にでもあり、したがって人類のすべての‘意識’に先行して存在するものである。
5. 音楽民族学の角度からみると、トンパ教はナシ族祖先の‘宗教’ではなく、チベット族の‘本来’の教えがナシ族のなかで伝播する際に変異したものである可能性が

高い。しかし‘トンパ文字’の象形文字はナシ族の創作したものであることに疑いはない。

6. 『熱美蹉』に類する‘悪魔払い’の歌舞が人類の行為のなかに多数存在する事実から、人類原初の‘悪魔払い’の‘芸術意識’の発生は労働の際の‘芸術意識’に先行するものと推断される。

7. 『熱美蹉』の多角的研究によって、人類早期の芸術とりわけ音楽舞踊の発生について、未知の、極めて大きな成果が期待できる。

## 6. おわりに

麗江は高原の山中に位置するナシ族の集住地区であるが、その地理的閉塞性から経済活動には不向きであっても古文化の継承と保存にとっては好条件をそなえている。ナシ古楽の意義は道教音楽の保持にあるだけでなく、事実上、中国古代音楽の保存でもある。

ナシ古楽の中心は唐宋以来の詞や曲牌の音楽であり、それらは後に道教に借用され宗教的礼楽として継承され、中原では早くから変質し失われたものが麗江で代々伝えられ保存されてきた。今日、大研古楽会による復元が進み、ナシ族の音楽としてクローズアップされているが、そのなかで重要な役割を果たしたのがナシの怪傑・音楽の奇才とうたわれる宣科氏である。氏は、今日では読むことしかできない唐宋の詞・曲を、演奏のみ存在する洞経音楽と組み合わせることによって復元に成功し、その歌唱が可能となった。氏によって‘音楽の活きた化石’が発掘されたと言える。宣科氏の功績によって、ナシ族の伝承や麗江‘出土’の道教音楽と唐宋音楽が明らかとなり、中国古代音楽史はもはや

‘無声の音楽史’ではなくなった。氏の新学説は音楽史のみならず、人類学、言語学、宗教学、考古学などの学術研究にとっても貴重な意味をもっている。

氏はその学識、才知、ユーモア、弁舌、熟練した英語によって国内外の人々を魅了してきた。今日、これらの古楽は寺院の中から出てコンサート会場に移り、かつて宗教儀礼や文人雅士のためにあった音楽が今や市民のためのものとなり、その用途ももはや祭祀や祈祷のためのものではなく、教養と人格を磨くためのものとなった。現在、麗江の大研古楽会は1988年に舞台演奏をはじめてより、すでに海外から20万人近くもの観光客を集めている。音楽は‘世界の共通語’であり、これまで16ヶ国で古楽の演奏会が開かれてきた。

統計によれば、今や麗江には20余のナシ古楽会があるという。当地の行政は農村に一群のナシ古楽保存地域を設け、民間の歌手、楽師および民間楽器の製作者に対して重点的保護を行っている。しかし、貴重なナシ古楽も現代の流行音楽の浪を受け、麗江では今や70歳以上の高齢者しか‘工尺譜’のような古譜を歌うことができない。このこととともに、ナシ古楽の伝承と研究自体も後継が絶える状況に瀕していると伝えられる。数多くの消失しつつある口承文芸などの非物質的遺産と同様、ナシ古楽も変質と途絶の淵にある。麗江県の学校では洞経古楽を教えることはないため、老人の直接口授によってその演奏を一曲一曲習うしかないのが現状である。

宣科氏はかつて長年に亘る労働改造の服役生活を送ったことがあったが、「如何なる困難と挫折も神が私に与えた試練である」と述懐す

る。これが今の氏の滔滔たるユーモアの根源になっているのであろうか。

いずれにせよ、今日のナシ古楽の成果は、中国の改革開放によってもたらされた変化の結果であり、思想文化界が自由化された証でもある。宣科氏の幸運は麗江当地の改革開放が収めた大きな成功の縮図であるとされる。

## 図版出典

図版1 [浪淘沙] 周文林『宣科与納西古楽』p.198  
雲南美術出版社 2001年

図版2 [山坡羊] 周文林『宣科与納西古楽』p.199  
雲南美術出版社 2001年

## 文献・資料

- ・村松一弥『中国の少数民族——その歴史と文化および現況——』毎日新聞社 1973年
- ・生明慶二「『伝承機能音階論』序説」学習院大学東洋文化研究所『調査研究報告』No.25 1988年
- ・胡倫『雲南旅遊』成都地圖出版社 1998年
- ・雲南民族学院編『雲南』雲南教育出版社 1999年
- ・宣科主編『中国西南古納西王国』雲南美術出版社 1999年
- ・周文林『宣科与納西古楽』雲南美術出版社 2001年
- ・宣科「宣科与納西古楽」VCD 廣州音像出版社
- ・劉俊傑・平麗珠「樂土古楽」VCD 廣州音像出版社
- ・張宇丹「納西古楽」VCD 中国国際電視總公司出版
- ・雲南廣播電視節目制作中心「納西古楽」CD 上海音像出版社
- ・戈阿干『中国歴史文化名城叢書 麗江』旅遊教育出版社 2001年
- ・牛崇榮『雲南的世界之最』雲南人民出版社 2003年
- ・王子初『中国音楽考古学』福建教育出版社 2003年

(本稿は2001年度、名古屋学院大学研究奨励金による研究成果の一部である。)